六七期二班新聞

医者への一歩

三重大学病院は、高度急性期・急性期医療を中心に行なっています。年間約一万八千人の入院患者さん、約三十三万人の外来患者さんを受けています。私達は八月四日に三重大学病院に取材に行きました。三重大医学部附属病院の爲田先生の夢は遺伝子の研究者になることでした、でも、爲田先生にはもう一つの夢がありました。それは医者でした。高校生の時、爲田先生は医者と研究者、どちらを選ぶかとても迷いました。

医者への動機

爲田先生は医者への道を選びました。でも、研究者になるためのその動機になったのは、大学でした。

先生は、三重県が大好きでした。先生は、三重県を離れたくなかったけれど、研究者になるための大学は、他県にしかなかったので先生は遺伝子の研究が出来るかもしれないという希望も持って三重大学の医学部に入ることにしました。そこで、医者という仕事は、幅広い仕事で、面白い仕事だと気づきました。そして、先生は元々人体に興味があったので、消化器・肝臓内科の先生になりました。

先生の毎日

爲田先生は月曜日、木曜日、たまに土曜日に病院で働きます。一日十人から十五人の患者が診察に来ます。爲田先生は診察を主にしていて、手術はあまりしません。ですが、去年までのコロナ禍の影響はとてもありました。例えば院内感染を防ぐために治療ができない時があり、患者さんの治療を延期することがしばしばありました。

未来を担う学生へ

爲田先生に医者になりたい学生へのコメントをいただきました。

爲田先生は「病気が世界から無くなることはありません。医者は患者さん一人一人の病気を治すだけでなく、目の前にいる患者さんに寄り添い、患者さんの生きる力になることが大切です。そして、患者さんを大切にし、病気と現実をしっかり直視しましょう。」